

# 「プチ同期会」で思う

関東八千浦会 会長 波多野繁夫

平成二十一年八月十六日午後五時、直江津駅前ホテルハイマートの一角「レストラン多七」、昭和三十三年直江津高校普通科卒の男性十三名、女性六名の御歳七十一歳の面々が集合、会合名は「直高三二会プチ同期会」。

今を過ぎること二十年ほど前、ようやく育ても一段落した五十歳を期して同期会を開こうと提案し、毎年上越は勿論の事、湯沢、佐渡、妙高、箱根、上田と所を替え開催し、六十歳の還暦を記念しました。

平成十一年四月十九日より二十四日まで五泊六日で恩師を加え総勢三十六名でタイ旅行を敢行、帰って記念誌「ゴールデンシャワーの国へ」を百部発行、お互いの旅の感想を記した冊子、記念のスナップ写真に加えてその時の感動を永く脳裏に残し後日楽しむためには文章が一番

との高校の国語教師の中井君の意見、尤もと参加者の作文を百ページに亘り集録、参加者は勿論のこと知人友人に実費配布、好評を博す。

成田に降り立ち興奮さめやらぬ口調で「又連れてって」の女性陣の声に気を良くしつついついその気になり、平成十四年四月十四日より二十一日にかけてアテネオリピック開催を翌々年に控えたギリシヤへ友人知人を含め二十四名で、再度旅行。

これ以降五十歳から毎年欠かさず催行した同期会も、持ち回りで決めていた幹事が全く動かさず中止したまま。

同期生からの毎年の年賀状には同期会の再開を希望する者多く、これに応えようと思ひ、それなりに長けた何人かに提案するもなしのつぶて。

今回故郷八千浦中学校同窓会総会に、

関東八千浦会を代表し招待されたのを機に、上京の度に関東地区在住の同期生と夜の宴席を設ける事を唯一の楽しみにしている伊東君に連絡。上越市在住の諸君だけによる「プチ同期会」の開催を提案彼快諾。

早速の電話作戦、私は私なりに彼の連絡してない諸君に手紙での連絡、結果冒頭の人数が集合した。

予想以上、久々の再開にしては皆さして年老いておらず若々しい。それは見掛けだけでなく気持そのものが若い。乾杯の音頭が終るとともに待って、またとばかりに飲むは食べるはウエイトレスの給仕間に合わんばかりである。一体彼等彼女等の胃袋はどうなっているのだ。これだけの食欲があればこの先当分大丈夫。高校生活の三年間、それは勉強、体力作りにおいてもお互いにライバルであったはずだ。

各地で開かれる同期会、小中学校そして高校の会合、大学の比ではない。多感な少女時代の時から心身共に大人への移行時代、育つ地域と同じく人によっては幼稚園から高校迄を同じくし兄弟よりも生活する時間を多く共有して来、そればかりか祖父母もそして親も我が子と同じように注意もし、叱りもして地域ぐるみで育てて来た。食べる物も見る物も聞く物も、ほぼ同じくして育つ、価値

観もほぼ同じくってあたりまえ、これまで生活に追われとも他人の事などかまってはおられなかった。

しかし年金生活に入り時間に余裕が出来ることややはり高校時代の友人の身の上の事が気になる。六十歳で還暦の記念旅行そして七十歳で古稀の同期会兼記念旅行を頼っていたが実現出来なかった。

今からでも遅くはない。来春には同期生に案内し、二年遅れの古稀を盛大に祝う同期会を開き嫁の悪口良し、近所付き合いの愚痴も良し、孫の自慢結構、息子、娘の自慢話、これ又結構、大いに聞こうじゃないか、不平不満で一杯になった腹にご馳走は入らない。

鱈腹食べ、大いに飲み、そしていい温泉に入り古稀をわずかばかりすぎた体に活力を与え、明日に向って生きよう。そんな会合を企画しようと、知恵を絞る今日この頃である。

